

道 -ROAD-

大阪学芸中等教育学校
校長室だより

不滅の法灯

2 学期が始まり約 1 か月が経ち、朝夕はしのぎやすくなってきました。日中はまだまだ残暑が続いていますが、秋の訪れが近づいています。季節の変わり目というのは体調を崩しやすいので、自身の健康管理をしっかり行って欲しいと思います。

先日の全校集会で話をしましたが、私は夏休みに**比叡山延暦寺**を訪れました。皆さんも歴史で習っていると思いますが、比叡山延暦寺は 788 年**伝教大師 最澄**によって創建された天台宗の総本山で、「古都京都の文化財」の一つとして世界文化遺産に登録されています。現在もお坊さんが、「千日回峰行」という厳しい修行を続けていることでも知られています。

延暦寺は、比叡山全域が境内になっており、東塔（とうとう）西塔（さいとう）横川（よかわ）の 3 つのエリアに分かれ、どのエリアも見どころがとても多いです。バスやケーブルを利用した場合の拠点となるのが東塔、そしてその本堂が**根本中堂**（こんぽんちゅうどう）で延暦寺全体の総本堂でもあります。H28 年から 10 年間の予定で大改修を行っており、今は外観を見ることはできませんが、お堂内は通常通り見ることができます。

根本中堂には、最澄が自ら彫った本尊薬師如来像を安置し、その前でゆらぐ 3 つの釣り灯籠を見ることができます。これが「**不滅の法灯**」で、現在まで 1200 年以上一度も消えることなく輝き続けています。最澄が天台宗を開く際に、「互いを尊重しあう心をもって一隅を照らす人となる」という願いを込めて灯したものです。実は織田信長による焼き討ちで一時途絶えますが、先に山形県立石寺に分灯されていたものを移すことで、消失の難をのがれ現在まで続いているそうです。

現在も菜種油を燃料にして灯心が浸り、火がともるという構造の灯籠内で燃え続けています。その灯火を守るために菜種油が切れないように注ぎ足し、炎の芯が燃え尽きてしまう前に新しい芯に代えなければなりません。

では、どのようにして守り続けてきたのでしょうか。当番や役割を決めて、常に誰かが見張り、油を注ぐタイミングを慎重に監視しているわけではありません。特に決まったルールはなく、**みんなが法灯の存在を気かけ、常にみんなの意識が向けられている**のです。気づいた人がその都度油を注ぎ、芯を代え、多くの人の手で灯され続けているのです。

当番や役割を決めたら、しばらくの間はうまくいくかもしれないが、決めた時点で**誰かの仕事**というような甘えが生まれ**他人事になってしまい失敗する**という考えです。灯火を守り続けることは、決して他人事ではありません。自分の事としてとらえ、普段当たり前に日常生活に溶け込んでいる事など気を引き締めて行っています。

油が切れたら灯火は消えてしまいます。決して**油を絶やさない**。ここから「**油断**」という言葉が生まれたとも言われています。心の中に甘えや迷いが出て、当たり前のことができないことです。学校生活において、慣れてきて気のゆるみが出てきていませんか。「慣れ」は良い方にも悪い方にも働きます。常に適度な緊張感を持ち、**他人事にせず自分の事としてすべきことは何か**を考えて欲しいと思います。

※9 月 21 日（土）、NHK 放送プラタモリ「比叡山はなぜ“母なる山”になった？」の中で「不滅の法灯」が紹介されていました。次回 9 月 28 日（土）も比叡山に関する放送です。